


実験展示をつくる

実験展示をつくる記録

基本構想から展示実施まで

青木 俊也

はじめに

2007年11月に開催された実験展示「あるくー身体
の記憶ー」は、神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の
研究成果を広く発信する方法として構想されたもの
である。それは、私たちの日常生活において自然と
身に付けているあいさつなどの身体技法が、世代を
超えて受け継がれてきたものであることをテーマと
して、身体に記憶された非文字資料の豊かな歴史的
世界をメッセージしている。

この展示は構想当初より、「新たな研究成果を展
示という形で発信する過程そのものが一つの情報で
あり、報告書あるいは映像記録として発信されるこ
とが必要である」とされていた。

身体技法というテーマは、従来あまり行なわれて
いない、新しい分野の展示である。この展示がどの
ようにつくられてきたのか、言い換えれば、どのよ
うに身体技法を展示資料という形態に資料化してき
たのか、まとめあげてきたのか、その実験性を持ち
得てきたのかを、構想開始（2005年8月）より閉幕
（2007年11月末）までのプロセスにおいて記録する。
なお、この記録は、実験展示班のメンバーとして展
示制作に参加した筆者が、実験展示班のメンバーの
議論をふまえたうえで、自己の主体的な思考によっ
て、そのプロセスを実験という視点から記述してい
るものである。

I 実験展示の構想

実験展示をつくる構想は、実質的には2005年8月
のワーキンググループ（青木俊也・中村ひろ子・福

田アジオ）が検討することによって始められた。そ
のなかで「実験」という特性について、「発信する
情報」と「発信方法」の両面から考えることとなっ
た。この構想にしたがい「発信する情報が図像、身
体技法、環境・景観の体系化から明らかになった新
たな世界、新たな領域、そして非文字資料の持つ可
能性といった実験性を持つだけでなく、発信方法に
ついても展示制作途中での評価導入によって、展示
の完成度を高める展示制作手法、来館者が展示に参
加することで完成する展示手法、また視覚、聴覚、
あるいは言語といった展示がかかえるさまざまなバ
リアを超えるための試みなど、今展示に求められて
いる課題への新たな実験」に取り組むこととなった。

この展示は次のように構想された。①展示タイト
ル（仮）「身体の記憶ー非文字の世界」／②展示会
期 2007年9～11月のうち3～4週間／③展示会場
神奈川大学日本常民文化研究所参考室／④展示趣旨
「図像、身体技法、環境・景観の各資料を活用し、
総合して、日常的行動様式を、環境との関連で地域
差として把握するとともに、過去からの歴史的展開
のなかで位置付け、人類文化の多様性を示す展示と
する」（1-1展示理念図参照）。

●実験展示班による展示構想をもとにした議論

その後、実験展示班が組織された。このメンバー
（青木俊也・河野通明・田上繁・中村ひろ子・浜田
弘明・福田アジオ）によって展示構想に基づく実験
展示の方針であるバリアフリー展示、展示への市民
参加、展示テーマである「身体の記憶」をめぐる
議論が開始された。「身体の記憶」を展示する方法
として、企画段階からの観覧者（市民）調査による
展示づくり（エバリュエーション）、文字解説のな
い展示、参加型展示などの実験的な展示方法の企画

が提案されるなかで、「観覧者が自らの身体を自覚する装置」という考え方が示された。この考え方は、この展示をつくるうえで基調となるものであった。さらに、展示テーマに沿う形で生活環境、自然環境をどのように展示していくのが問題となった。この問題は展示が具体化し、実施する段階まで検討された。展示に対するバリアフリーの課題としては、車椅子使用者の展示室へのアプローチ、視覚障害者の人たちに対する展示方法などが話し合われた。

II 実験展示班メンバーによる 展示プラン

平成18年度に実験展示班の新たなメンバー（榎美香・刈田均）が加わり、このなかの5人のメンバーによって具体的な次の展示プランが提案された。

(1) 独自の発想による展示プラン

(A案) 光のない世界の現象を展示（刈田）

光のない世界の現象を展示する提案は、光のない視覚障害者の世界を健常者にも体験させるとともに、語りという非文字資料の世界を表現するプランで、視覚障害者の感性を体験することを意図していたと考えられる。このプランは、健常者に視覚障害者の世界を体感させるという、バリアフリー展示の発想を逆転させるものであり、これ以降、「歩く」が展示テーマとなった段階でも、視覚障害者の歩きを体験させるという展示方法が検討された。

(B案) 「『一枚の布』一包む・装う・飾る」（浜田）

「『一枚の布』一包む・装う・飾る」は、①様々な織り、デザインの布を図像資料として位置づけた「生地としての布」、②包む、装う、飾る布を身体技法と関連付けた「用途としての布」、③各国・地域の布における気候差による使用法を環境と関連付けた「世界の布」で構成され、布という実物資料から引き出した情報から非文字の世界、図像、身体技法、環境・景観を統合して表現する展示の提案であった。実物資料から導き出された身体技法を表現しようとしたことは、「身体記憶」という展示構想の枠組みとは別の新たな視点を示している。

これらの2つの展示プランは、展示構想に関連を付けながら、独自の着想によってつくられたものであったと考えられる。

(2) 展示構想を引き継いだ展示プラン

これら2つの展示プランに対して、当初の展示構想を引き継いだ「身体記憶」をテーマとした3つのプランが提案された。どの展示プランも、それぞれに身体記憶を表現するための考えが示されている。

(C案) 「身体記憶」I（中村）

まず1つめのプランは、COEプロジェクトの研究成果の還元、非文字資料の持つ可能性を伝えることを起点として展示構想の理念を引き継いだものである。「身体記憶」を展示する方法として、展示室において「観覧者が自らの身体に出会う」ことを意図し、観覧者が自分の身体を使ってみる場面を設定し、歴史の中の、あるいは他民族の身体技法についての映像や画像に合わせて身体を動かし、自らが持つ身体技法との異同を感じ取ることを計画している。この「観覧者が自らの身体に出会う」プランは、後述する実施した実験的展示方法に引き継がれた提案であった。

そして、4つの小テーマとして「①日常の中の身体②モノと身体③近代化された身体・つくられた身体④ジェンダー化された身体」を挙げ、身体技法をとらえる明確な視点を用意している。これらの小テーマは、行為を展示に表現するうえでの確かな指標となるもので、展示制作のなかで具体的な課題となっている。

(D案) 「身体記憶」II（榎）

次のプランは、長い時間をかけて身体に刻み込まれてきた文化の記憶を、絵画資料、民具、伝承などから復元し、その変遷を明らかにすることを計画している。そして、身体記憶をたどる「日本人のしぐさ」として、「歩く・走る、座る・手足を使う、運ぶ、切る・削る、祈る・踊る」という多彩な身体技法から展示することを提案している。このプランは非常に具体的で、例えば、「座る・手足を使う」では、地面に座る、腰掛ける姿（大型パネル）、

筵・円座などの座る道具、いざり機、桶屋道具、下駄屋道具（実物資料・絵画資料）桶屋・下駄屋の製作過程、立ち膝で食事をする女性（映像・資料など）という展示構成をとって、座る行為が私たちの生活に記憶されたしぐさであることを明確に表現している。また、運ぶに対して天秤棒を担ぐ、手足を使うに対して足指による草履あみなどの身体技法に対応した体験のメニューが用意されている。

(E案)「身体の記憶」Ⅲ（青木）

もう1つのプランは、「運ぶ・洗う・食べる・座る」を項目として設定し、実験展示の試みとして①文章・文字を用いない展示解説 ②インストラクターの演技 ③観覧者の体験 ④視覚障害者向けの触る展示 ⑤展示室外での水を使ったワークショップを提案している。

これらの展示プランを統合して基本展示プランを作成するに至った。そのプランの詳細は後に記す。

Ⅲ 展示テーマ「歩く」

(1) 展示テーマ「歩く」の提案（福田）

これらの展示プランで取り上げられた身体技法は、日常の行為、職人の行為、非日常の行為のなかで、現在の私たちの行為とそれ以前の行為とで違うことを意識して選択された構成となっている。このことに対して、展示プランに対する話し合いのなかで、実験展示のテーマとしてふさわしいと考えられたのは、最も冒険的なテーマだといえた「歩く」あるいは「歩く・走る」であった。

構想段階においては、身体技法のなかの展示テーマとして、一般の観覧者が自身の身体感覚を感じ取れる共通性を持った日常的な行為である「あいさつ・食べる・はこぶ・ねる・くつろぐ・いのる」が取り挙げられ「歩く」ことは示されておらず、先の展示プランの中でもD案「身体の記憶」Ⅱで日本人のしぐさの一つとして、「歩く・走る」が取り上げられているだけであった。

これらの展示プランを検討するなかでも、最も人類にとって初歩的な行為である「歩く・走る」を生

態的でなく、社会的にとらえることがCOEの展示テーマとしてふさわしいという提案がされた。それは「現代のわれわれの歩く姿が世界的にみて普遍的なものではなく、また、その歩き方は時間軸のなかで過去からそのまま連続してきたのではなく、様々な状況のなかで、変化し現代的な歩き方になってきた」という大胆な仮説の前提に立った提案であった。

(2) 困難な「歩く」展示の実験

● 展示実績のないテーマ

これまで、「歩く」ことがわかりきった基本的な行為だという認識によってか、現在の私たちの「歩く」が世界各地の人々の「歩く」とことと違いがあることが、観察による印象として記されてきた。また、履物を展示すること、履物の博物館はあっても、これまで「歩く」ことの文化、歴史をテーマとした展示が行われたことを確認することはできなかった。さらにこのテーマに対する実証的な歴史、文化研究を見出すことはできなかった。

● 「歩く」展示のイメージ

したがって、この研究実績の乏しいテーマを展示するにあたって、実際に展示が立ち上がるのかどうか確証を持ち得ない状況であったといえる。議論において、「歩く」というテーマでは、実際の展示のイメージができないなどという否定的な感想や、履物を中心にした単調な展示としてしかイメージができないという見通しが述べられた。

総じて、職人の行為や日常の行為の展示が、その行為に対応した民具、生活用具を使う状況を示すものとしてとらえる傾向がある。そのような傾向のなかでこれらの否定的な見解をとらえると、「歩く」を展示することは、そこに取り上げられる実物資料は履物に絞られるという予測にもとづくことを意味していた。

展示の基本プランについて話し合っている時点において、現在の私たちの歩き方とかつての歩き方や他地域の人々の歩き方にどのような違いがあるのか、明確なビジョンを持っているわけではなかった。展示班内でかつての歩き方としてイメージしていることは、例えば、蟹股であり、前かがみ、猫背の姿

勢の歩き方であり、一般的な認識の域を出るものではなかった。ゆえに歩き方に歴史的、文化的な背景のもとで時代差、地域差があるという仮説を実証するためには資料化を進めるしか方途はなかった。その結果、違いがなければそのことを展示するしかなかったのである。

IV 基本展示プラン

基本展示プランは、Ⅱ章で記した実験展示班メンバーによる展示プランを統合して作成したものである（青木）。そこでは、「歩く」をテーマとする提案を受けて、「歩く・走る・運ぶ」をテーマとした。ここでは、このプランにおける非文字資料のとらえ方、展示テーマを記すとともに、そこに関係する議論を記す。

(1) 図像・身体技法・環境のとらえ方

基本展示プランのなかでは、非文字資料の世界を表現する ①図像 ②身体技法 ③環境・景観の位置付けを整理している。展示構想としては、非文字資料の体系化を表現する手段であり、図像、身体技法、環境・景観を統合して表現されることが示されている。その理念として3者を対等に位置付けることが求められていたと考えられる。

しかし、実際には展示構想の身体技法を中心に図像と環境を配置した関係を持っていた。これらの3つの非文字資料をどのように切り結んで展示するのかが、実験展示にとって基本的な課題となっていた。

この展示プランで想定した3者の位置付けは以下の通りであった。身体技法は身体の使い方を受け継いでいることの歴史性を表現する資料、図像は身体技法及びその行為が行われた状況を記録した資料、環境・景観は身体技法が行われる場所であり、その行為に影響を与えたり（与えられたり）する可能性を持った資料と考えた。つまり図像は、あくまで身体技法を読み取る資料として位置づけた。図像そのものを身体技法と対置する関係は、この実験展示においては結ばれなかったといえる。

●環境の資料化

このとらえ方に関して、実際の環境・景観を展示にどのように反映させていくかが、展示構想時より課題となっていた。特に身体技法が行われる場所として環境をとらえるなかでは、環境が身体技法のあり方を定めるという環境決定論に陥る危険性のあることが指摘されていた。このことは、展示資料の検索、展示の実施段階まで解決されずに持ち越され、結果として今回の実験展示では、歩くことに対する環境の関係を位置付けすることができなかった。

(2) 基本展示プランのテーマ

「歩く・走る・運ぶ」

展示テーマを「歩く・走る・運ぶ」とした。この展示テーマでは運ぶ行為をものを持って歩くこと、歩くことのバリエーションとして捉えようとした。「歩く」と「走る」では、場所や状況、履物、性別・職業・身分による違いを示し、「運ぶ」は、物を持った歩行としてとらえ、背負子の運搬やテルを使った頭上運搬などの運搬具と運ぶときの体の使い方、歩き方の違いを示すこととした。

その理由としては、「歩く・走る」では、展示すべき資料が少ないために展示として間が持たないと考えて、実物資料として運搬具を加えようとしたこと。さらに、後に述べるように『濫澤フィルム』の運搬具の調査場面を使った展示表現を考えていたことが挙げられる。

●「歩く・走る・運ぶ」から「歩く」へ

しかし、「歩く・走る・運ぶ」のなかで「運ぶ」は、行為として「歩く・走る」とは別の方向性でみたほうがよいという指摘がされ、「運ぶ」をテーマからはずして「歩く・走る」に絞ることが話し合われた。しかし、その後の図像資料の議論で、運んでいる姿の図像を省くのではなく、その人の脚裁きに注目すべきという指摘がされた。実際の図像や映像を資料化する段階では、何も持たず、手ぶらで歩いている図像は花見などの遊山の場面を除けば少なく、運ぶ姿を省くことはなかった。

「走る」も「運ぶ」と同様に「歩く」にテーマを絞るにあたって、テーマ名からはずすことにした。しかし、実質的には図像、映像の資料化の段階では

運ぶと同様に走る姿も同様に検討の対象とした。結果として、運搬具資料の展示を取り止めにしただけで、資料の対象としては、走る・運ぶ姿も「歩く」のバリエーションとしてとらえることになった。

(3) 展示資料の計画

当初はアチックミュージアムによる調査資料である『濫澤フィルム』編纂物『絵巻物による日本常民生活絵引』を展示資料候補として、最初に検討することを計画した。『絵巻物による日本常民生活絵引』の展示資料化として、歩く・運ぶなどの図像を抜粋することを計画した。また『濫澤フィルム』の展示資料化として①歩く・運ぶなどの映像を抜粋し、編集する。そして②その映像から身に付けている履物・運搬具・装束や状況などを読み取ること。③それらに対応する履物・運搬具を国立民族学博物館が所蔵するアチックミュージアムによる収集資料から選択する。④その複製をつくって使用し、その特性を把握する。⑤使用状況を映像化する。モーションキャプチャーで身体の動きを読み取ることが計画した。具体的には展示方法を記すなかに詳しく述べるが、これらの資料化するプロセスを展示に表現することを考えていた。

しかし、「運ぶ」が展示テーマから省かれたことで運搬具の展示がなくなり、この展示資料の計画で実現できたのは、『絵巻物による日本常民生活絵引』の「歩く」図像と『濫澤フィルム』の「歩く」の映像の抜粋であった。

V 展示テーマ「歩く」への疑問

(1) 『絵巻物による日本常民生活絵引』の図像の分析 (榎)

●歩く図像から歩き方は想定可能か

当初より、歩く・走る姿を描いた静止した図像からその動きを推定していけるのかが問題となった。「歩く」図像を探す手始めとして、『絵巻物による日本常民生活絵引』の歩く場面を検討した結果、履物の違いは把握されるが、静止した図像からの動きを

推測しづらいと述べている。また、環境による差異は説明しやすいが、時代、文化によって歩き方が違うという説明は難しいのではないかという見通しを述べている。

●「歩く・座る」という提案

この見通しのもとに、『絵巻物による日本常民生活絵引』から動きがない身体技法である「座る」に注目し、その場面として小便の座り方、女性の座り方、拝むときの座り方、目上の者に対する座り方を集めた。「座る」では、環境による差異は説明が難しいが、時代や文化による差異は比較的明確にみられることを指摘している。ゆえに「歩く・座る」という性質の異なる身体技法を相互補完的に並列的なテーマとする提案がされた。

今から考えると、「座る」という行為は、糸車を使った糸つむぎ、草履作りなどの座って行う手仕事、桶作りなどの職人仕事の行為ともつながっていく。現在では行われなくなった行為として、さらに立ち姿勢の西欧文化と座って行なうこの国の文化の違いとして把握できる。展示に表現しやすいテーマであったと考えられる。

(2) 「歩くで大丈夫？」(河野)

このテーマの問題点を整理した「歩くで大丈夫？」という指摘がされた。以下にその項目を記す。「1. 展示は違いを見せるもの。／2. 『歩く』『走る』は文化でない。(「歩く」「走る」は、遺伝的にプログラムされていて文化の影響を受けていないだろう。)／3. ナンバ歩きに関していわれていることが正しいのか。／4. 文化の違いが出るのは『座る、しゃがむ』や作業姿勢。／5. 近代化・欧米化で変わったのは何か(学校教育で行進や体操をすることで、日常の歩き方が変わるわけではない。)／6. はきもの日欧比較の観点。／7. 展示が違いを示すものなら、文化以前の歩く・走るでは困難で、文化要素に切り替える必要があるのでは?／歩くで大丈夫?」。この多岐にわたる現実的な問題提起の基本は、歩くという行為が歴史を反映した文化として実証的にとらえられるか、という疑問から発せられたものであったと考えられる。しかし、この時点において展示

構想自体が未だ仮説段階であるので、先の指摘に対して、資料の内容から検証して判断することはできなかった。実際にこれらの指摘を考えなければいけなかったのは、実際の資料化の段階であった。

(3) 「歩く」テーマの継続

このような指摘があったにもかかわらず、「歩く」テーマは継続されることになった。その理由となったのは、先に述べたようにこのテーマの従来の研究実績が乏しいことへの着目が挙げられる。

これらの問題提起に対して、歩くことはほとんどの人たちが行なう行為であり、あえて思考の対象としないような、わかりきったこととして考えられているが、このテーマを展示することによって、歩き方の変化という仮説を実証し、新たな発見を見出す可能性があるという意見や「歩く」というテーマの基本は動きであり、このテーマに集約してもがいたら何かが出てくるのではないかという意見が出された。まず、資料化に取り組んでみようという意見であった。

展示を企画する立場でいえば、「歩く」ことそのものを展示表現することは難しく、どのような展示になるのか、この時点で具体的にイメージできない。しかし、新たにこのテーマに取り組むことが、これまでに表現されてこなかった非文字資料の歴史的世界を新しく表現することにつながるという期待のもとに変更せず、その準備に取り組むことになった。

VI 「歩く」記憶へのアプローチ

(1) 「歩く」行為を展示する課題

これまでの実験展示班による議論から見出された課題を整理し、実験展示の資料化に取り組んで考えたこと、展示をつくりあげたなかでさらなる課題として残されたことを整理してみたい。

「歩く」ことの変化を歴史的世界における行為の展示として構成するには、まず次の2点の課題を表現することが必要であった。

その一つは、この展示の起点となるべき、近代化

(欧米化)の以前から、受け継がれてきた「かつての歩き方」を示す資料を探して、その歩き方を想定することである。もう1つは、想定した「かつての歩き方」が、近代化以降の生活変化のなかで、現在の私たちの歩き方とどのような関係があるのかを考えて位置付けることである。これらの課題に対して、近代に入ってからどのように歩き方が変わってきたのか、変わらない部分を持ち続けるのかという視点を持つ必要があった。

現時点で整理してみると、展示構成のなかで、観覧者自らの歩く感覚、歩き方の認識、自分たちの歩きのなかに「かつての歩き方」が残されているのか、つまり過去の世界から引き続いた歩き方をしているのか、あるいは近代的な歩き方の影響を受けているのか、つまり現代的に身についた歩き方をしているのかといった課題にアプローチすることに取り組まなければならなかった。

(2) 文化としての「歩く」

これらの課題や展示基本プランを巡る議論を受けて、メンバーで「歩く」をテーマとする展示に関する企画案、資料、情報を寄せることとなった。

●「歩く」を巡ることば(浜田)

「歩く」に関する文化的資料として、「歩く」を巡ることば、すなわち「あるく」(一步一步踏みしめて進むなど)・「あるき」(あるくことなど)・「あし(足・脚)」(胴から下に出てからだを支え、また歩くのに使う部分)や、「忍び足で歩く」などの「歩く」という言葉の派生語によって動作としての「歩く」という言葉のバリエーションを示すとともに、Shuffle(足をひきずって歩く)・Limp(びっこを引いて歩く)など英語の様々な「歩く」ことを示す言葉を調べた報告がされた。

●日本人の歩き方に関する記述(青木)

歴史学研究者などによる日本人の歩き方に関する記述を集めた報告がされた。

日本人の歩き方、もしくは近代以前の日本人の歩き方に関する記述には、2つの特色がみられた。

(A) 膝を曲げた歩き

その一つは「膝を曲げた歩き」で、以下の文献に

共通して記述されている。それは「腰がどっかりすわって、重そうに下半身をひきずる。猫背のうえにアゴをつきだし、小股でヒョコヒョコ進んでゆく。踵よりつま先のほうがはやく着地する。膝は十分にふかく屈伸している。腰と膝の二段かまえて前進する」(樺山1987: 210)、「前かがみで、ひざを曲げ、踵を引きずって歩く」(吉田2002: 23)、「緒をかけるだけの履物が多かったためか、摺り足に近い歩き方、踵をあまり地面から上げずに膝の曲げが大きい歩き方をする」(中澤2005: 79)。これらの記述では共通して膝を曲げ、足を引きずるような歩き方を表していると考えられる。⁽¹⁾

(B) ナンバ歩き

また、先の右手と右足、左手と左足を一緒に出す歩き方、いわゆるナンバ歩きと称された歩き方について記述している文献もみられた。「近代以前の日本人の歩き方、走り方は、近代のそれとはかなり異なっていて、右手と右足、左手と左足を一緒に出す歩き方(いわゆる「ナンバ」)はめずらしくなく、大きく手を振る歩き方は一般的でなかった」。(三浦1994)

『ナンバ』とは、右手と右足をいっしょに出す半身の構えのことで、この姿勢を基本にした歩き方が『ナンバ歩き』である。具体的にいえば右足と右手、左足と左手を交互に前に出して歩く前かがみの歩行法」(吉田2002: 24)とされて、近代以前の歩き方として記されている。

これらの記述にみられた、(A) 膝を曲げた歩き、(B) ナンバ歩きは、図像から「かつての歩き方」の特色を考えていくうえで重要な参考資料となった。

(3) 「かつての歩き方」の想定 I

●2つの「かつての歩き方」

先に挙げた近代化(欧米化)の以前から受け継がれてきた「かつての歩き方」を示す資料によってその歩き方を想定するために、歩く図像の資料化の作業として、『絵巻物による日本常民生活絵引』、『東海道名所図会』・『都名所図会』などのなかの歩く図像を集めてみた。まず、個別の図像の特性(性

別・年齢・職業〈身分〉・履物・服装・持ち物)をとらえるのではなく、集めた図像を重ね合わせてみることで、歩く姿の共通した体の姿勢を探し出した。その結果、男の歩き方の特徴として①「腰を落として膝を曲げて歩く」②「右足とともに右半身を出して歩く」(3-1-10かつての歩き方をさぐる参照)の2つの歩き方が想定された。この想定した2つの歩き方のパターンは、先の文献にみられた(A)膝を曲げた歩きと(B)ナンバ歩きと関連付けながら導き出したものであった。

①「腰を落として膝を曲げて歩く」のは、図像資料には腰を落とし、膝を曲げて歩く様子がよくみられる。また、②「右足とともに右半身を出して歩く」の(3-1-10かつての歩き方をさぐる参照)はその特色がよく描かれている。左足とともに左半身を出して歩く姿として描かれる場合もある。この歩くフォルムも図像には多くみられる。

●歩く姿の特性

次の段階では図像の歩く人の性別・年齢・職業・身分や、履物、服装、歩いている場所、状況を区分して、それらの指標を照らし合わせて歩き方の特性を把握する手順、方法を考えた。しかし、実際には、「かつての歩き方」のパターン①「腰を落として膝を曲げて歩く」②「右足とともに右半身を出して歩く」を想定するまでにとどまり、指標との関係を考察することに及ばなかった。

例えば、女性の歩き方の特徴として、内股というイメージを持っていたことに対して、実際には着物によって脚の動きは隠され、小股で男ほど腰を落としていない傾向がある以上にどのような歩き方をしていたのか見出すことはできなかった。

この他に、履物の違いによる歩く姿や、裸足で歩く姿、走る姿などを図像でみたところ、これらの資料を検索したなかでは、履物の違いによる歩き方の違いは見出せなかった。『耕稼春秋』では、農作業をする人々は裸足で描かれている図像を、『絵巻物による日本常民生活絵引』では、走るために履物を脱いで走る図像を確認しただけにとどまった。

●人の社会性を示す歩き方

歩く人の職業(身分)に伴うたたずまい、それを

示すような歩き方の違いもありうると想定される。例えば、『宮本フィルム6』「春の横顔：上野公園・動物園」の肩で風を切るような右足を出したときに右肩を出して歩く様子は、いかにも職人の風情が持ったたずまいを示している。今回の作業では、このような人物の詳細な歩き方の特色を見出すまでにはいたらなかった。また、このような資料を多く集めることで、歩く姿から見た社会性といった問題を展示に表現するまでにはいたらなかった。このことは、今から振り返れば身体技法としての「歩く」ことが持つ、歴史・文化を見出す機会を逸したことを意味している。

「歩く」図像・映像の姿の性別・年齢・職業・身分や、履物、服装、歩いている場所などの指標を生かしながら資料化を進めていくことで、それぞれの「歩く」図像・映像の人物の社会性（職業）を示す歩き方を導き出す可能性を、今後考えていかなければならないだろう。

(4) 「かつての歩き方」の想定Ⅱ

① 「歩く」図像の資料化の問題

●図像からの動きを想定すること

「歩く」テーマに対する議論のなかで、どのように静止画である「かつての歩き方」の図像からその動きを想定するのか。図像資料を重ね合わせてみていくだけで、動きをイメージすることには限界があると考えられ、その動きを想定することは困難であった。

●図像の歩く姿の描き方

先の「歩く」テーマの設定に対する問題点の提示のなかで、図像の歩く姿（走る姿）の描き方として、「顔を横向きより正面に向かせたり、体をねじらせているより開いているように描く傾向」があり、実態をそのまま描いていないという指摘に対して、実際の歩く姿を表した図像である可能性をどのように考えるのかという課題に直面した。

さらにそのことと関連して「このような描き方の図像を無批判に検討せずに、昔の日本人が走るときに右手と右足を同時に出して、いわゆるナンバ歩き、ナンバ走りが、かつての私たちの歩き方であ

るといふ一般的な説明と混同されないように、考えていかなければならない」とも指摘されていた。

これらの指摘に対して、図像の資料化では「右足とともに右半身を出して歩く」姿が、ナンバの構えと同様の姿勢であること、左右の手と足の動きを同じにして走っている姿が明確に描かれていることを確認した。

図像を描くときの規定とうもいべき描き方の傾向と、つまり類型的な図像を模写することによる特性をどのように理解し、図像と実態を照らし合わせていくのが課題となった。図像資料を考えることだけでは、想定した歩き方が実際の歩く姿の特色を表すものなのか、絵の描き方としての特色を表すものなのかの判別は、困難であった。

②映像資料の活用

「歩く」図像の資料化に伴って、図像からの動きを想定すること、図像の歩く姿の描き方の問題に直面することになった。これらの課題を考えるために、アチックミュージアムに関係した人物である濫澤敬三による『濫澤フィルム』、宮本馨太郎による『宮本フィルム』を活用することにした。これらの1930年代の映像に映った人が歩く姿は、図像資料が実際の歩く姿をイメージした可能性があることを示す、有効な資料となった。

●映像の資料化

「歩く」などの映像を、観察することを基本として、スロー、コマ割にして動作を確認した。そのなかで「現在の歩き方との違いがよくわかる歩き方」「現在と違うようにみえる歩き方」「現在と変わらないようにみえる歩き方」を抜粋した。その結果、「現在の歩き方との違いがよくわかる歩き方」「現在と違うようにみえる歩き方」として、外股、小股で歩いているようにみえることを確認した。その一方で、右手と右足を同時に出すいわゆるナンバ歩きにみえる映像は確認できなかった。

●図像と映像の重ね合わせⅠ

まず、「腰を落として膝を曲げて歩く」姿、外股歩き、いわゆる蟹股の歩きの映像と照らし合わせたところ、図像資料と共通する姿を確認した。具体的には例えば『宮本フィルム10』の「島の生活（八

丈島の記録)」における3人の若者の真ん中の人物が正面から蟹股で歩いてくる様子は、腰を落として膝を曲げ、腕を振らずに歩いている姿と重なる。現在でも、これほど腰を落としていないが、膝を曲げて腕を振らずに歩く姿をみかけることがある。

この映像の歩く動画の資料化によって、「腰を落として膝を曲げて歩く」ことが「かつての歩き方」として想定することも可能だと考えた。

● 図像と映像の重ね合わせⅡ

しかし、「右足とともに右半身を出して歩く」と似た姿、その姿勢から想定される歩き方を示す映像は見出せなかった。「かつての歩き方」の想定は難しいと考えた。

ただし、前述の『宮本フィルム6』「春の横顔：上野公園・動物園」における職人風の人が肩をゆすって歩く映像は、右足とともに右肩が前に出ており、「右足とともに右半身を出して歩く」姿に体の使い方が似ているようにみえる。そのことから、「右足とともに右半身を出して歩く」をくずした歩き方を「かつての歩き方」として想定することも可能だと考えた。この肩をゆすって歩く姿を、「右足とともに右半身を出して歩く」ことの自然にみえる歩きとして展示に位置づけてみた。

以上が、この実験展示において「かつての歩き方」を想定したプロセスであり、結果として基礎的な作業にとどまったことがわかる。

(5) 「かつての歩き方」の想定Ⅲ

これまで記してきた「かつての歩き方」の想定に対して、(A) 摺り足、(B) 行進の2つの歩く型について関連性を考えてみた。私たちの身体技法としての「歩く」を歴史的、文化的にとらえる要素としてこの2つの歩く型を展示資料として選択した。伝統的な芸能や武道の世界に形式化して伝えられてきた歩く型である摺り足と、近代の形式的な歩き方であり、近代的な歩き方のきっかけとなったと考えられる行進を、どのように位置付けていくのかを、考えていくこととなった。

● (A) 摺り足

この展示では、能の摺り足と「かつての歩き方」

として想定した「腰を落として、膝を曲げてあるく」こととの共通性を見出すことで、「かつての歩き方」が文化として意識的に伝えられてきたと想定してみた。

しかし、この想定を実証していくためには、さまざまな芸能、武道における摺り足を網羅してその特色を見出したうえで、「かつての歩き方」との関係を見る必要がある。

また、その結果武道の構えとされるナンバ、その姿勢の歩きかたとされるいわゆるナンバ歩きを、摺り足、さらに芸能の体の使い方との比較を通した、身体技法としての問題としてどのように位置付けるのかという視点を見出すこととなったが、そこまでの分析にはいたらなかった。

● (B) 行進

行進は、日本では近代の歩き方として認識されている。軍隊で行進ができない人が多かったエピソードは「かつての歩き方」が行進とは違っていたことを示している。行進は、欧米的な歩き方に強制する、あるくことの近代化を象徴的に示すことだと考えられるが、近代における歩き方の変化を、行進だけを要因として捉えることに無理がある。靴の導入によって私たちの歩き方がどのような影響を受けたのか、履物の問題を考える必要があった。困難な問題だが、近現代のなかで歩き方がどのように変わってきたのかという視点を、変わらない部分とともに示す必要があった。

実際に、行進の訓練を受けることによって日常的な歩き方が変わるわけではないという指摘があった一方で、行進によって日常的な歩き方は一変しないが、行進を日常では歩かなくても、体は覚えている。そのことに意味があり、行進が出来る人と行進をやったことのない人では、自分の歩き方のバリエーションが違う。近世の歩き方と現代の歩き方との違いを生じさせる要因になっているという主張がされた。

今から考えれば、行進とかつての歩き方の関係は、歩くという日常行為の長期的な変化を、どのようにとらえていくのかという、この展示の核心に関わる問題を提起している。

Ⅶ 展示方法の実験

近代的な歩き方としての行進が、学校、軍隊で訓練されたことが、自らの社会における位置づけを示す身振りとして普及していったことが考えられる。そして、そのような差を際立たせる存在として「かつての歩き方」が職人風な歩き方としてみなされていったという構図を描くことも可能であった。

結局、このようなプランを具体化していく上での議論を反映するような展示が実現できなかったのだが、展示をつくるプロセスが身体技法の中身を探り出そうとするための有効な議論の場となっていたことは確認できる。

(6) 残された課題

●環境の展示資料化

身体技法と環境の関わりを展示表現する一つの方法として、環境を復元して体験することが考えられる。しかし、山道を歩くとか、歩くをテーマに環境を展示室で復元することは困難なため、別個の場所（サテライト）でワークショップを行うとか、映像として環境を表現するなどの方法も検討されたが、実現しなかった。

実際の映像資料において、山道、雪上、海辺、街中などの様々な環境によって歩き方が違うという印象を受けた。映像の資料化の段階で、山道などの環境による歩き方の違いから、それぞれの歩き方の特色を見出すこと、その違いがどのように生じているのか想定することは、現状では困難であった。また、環境には履物の使い分け、運ぶ行為や運搬具などへの影響も考えられるが、その資料化も行なえなかった。

●世界各地の歩き方との比較

世界各地の人々の歩き方との違いを示す資料は、現在の私たちの歩く姿の比較対象として現在の欧米人の大腿で闊歩する歩き方を、イメージとして例示することにとどまっている。

(1) 展示構想における実験的な展示方法の発想

先述したように、展示構想における展示方法の実験をめぐる議論で、これまで博物館でできなかった冒険的な展示を行うことを目指して、文字解説のない展示、参加型展示などが提案されている。身体技法という行為を対象とする展示方法を考えるにあたって、必然的に行為を体験することが発想されている。先の各メンバーによる展示プランの共通した特色としても、観覧者が身体技法を体験する参加型の展示が重視されている。

そのなかでも、とりわけ「身体の記憶」を展示する有効な方法として「観覧者が自らの身体を自覚する装置」の実現を目指すことが話し合われた。身体技法を展示するにあたって、その内容を文字で解説するのではなく、観覧者の身体に何らかの訴え掛けをする仕掛け、映像や実演に合わせた行為で体験することで、その感覚を伝達させることが実験的な展示にふさわしいと考えられた。

(2) 基本展示プランにおける 実験的な展示方法の計画

●行為による行為の伝達

これらの発想から、展示というコミュニケーション形態において、非文字資料である身体技法を文字によって解説することは難しく、わかりづらい。本来、身体技法を身に付けるための最も基本的で効果的な手段は、手本となる行為を見て真似てやってみることだと考えられる。この見地に立って実験展示では、身体技法についての何らかのメッセージするために、このコミュニケーション手段を次のように再現する。①インストラクター（俳優）が演技（身振り・かけ声・語り）する。②その行為を観覧者が観察し、自らがやってみる。①②の解説方法を組み込んだ展示を実験し、文字を用いない（制限する）展示解説をつくることを以下のように計画した。

●資料化プロセスの展示

『澁澤フィルム』のなかの「歩く・走る・運ぶ」

の場面の資料化を進める。そのなかには背負い梯子・背負い縄による運ぶことを記録した映像がみられる。それらを抜粋して編集し、そこから読み取った身に着けている装束、履物、運搬具、状況（環境）を読み取って資料化する。民族学博物館に移管された実物資料などを参考にそれらの複製をつくり実演する。そして、身体の動きをモーションキャプチャーによって読み取り、資料化し、特徴を読み取る。これらの資料化のプロセス自体を展示として表現する。このことによって当時の調査から現在の調査資料を読み取る方法の変化を示す。以上のような手順を想定していた。

このようにかつての資料の再評価を行い、現在の研究レベルの分析を行った研究資料として提示する。

●『濫澤フィルム』の調査場面を演じること

この資料化プロセスの導入として、演じる要素を取り込んでみようと考えた。そのなかで実現したいと思い描いたのは、インストラクターのパフォーマンスによるミュージアムシアターであった。具体的には『濫澤フィルム』の映像に写された1930年代のアチックミュージアム関係者による調査場面を再現することを考えた。運搬具の使い方を調査した場面を、芝居としてシナリオ化して、展示室でインストラクターに役者として演じてもらう。その動作を、模範演技、手本にして観覧者がまねをして体験するというプロセスを思い描いてみた。

役者役となるインストラクターによる実演（解説）は、いわゆる展示解説員による決められた内容の解説、あるいは問答式の解説、あるいは芝居による解説などの様々なコミュニケーションの場面が想定できた。

しかし、結果的には、実際の展示内容として「運ぶ」を展示テーマからはずしたことで、図像資料における履物による歩き方の明確な違いを把握するにいたらなかったことで、濫澤フィルムの調査場面を生かしたミュージアムシアターは、構想だけのものとなった。さらに運搬具と履物の複製をつくって使用状況を映像（モーションキャプチャー）にして読み取る資料化も行わなかった。

これらの構想に対して興味は示されたが、今までのミュージアムシアターの例から演出が多くなる印象があり、博物館展示に求められている適切な解説にならないという否定的な意見も出された。

●非文字解説と音声解説

この展示解説プランに対して、言葉を発するのなら文字を使わない、サイン表示による展示とはいえないという懸念が示された。文字解説をしないサイン表示による展示が、言葉による解説をともなっていかなければ、文字を使わない実験的な意味を持っていないという考えのもとに発せられたもので、この意見は肯定されるべきものであった。

現時点で振り返れば、この指摘は文字を使わない展示方法として、サイン表示と音声・映像とインストラクターによるパフォーマンス、声掛け（言葉の伝達）との違いを明確に示されていないことから発せられたものであったと考えられる。サイン表示は非文字資料の展示として計画されたのに対して、音声、実演は身体技法の展示に有効だと考えたもので、それぞれの導入する意図が別であった。

●文字解説と音声解説

文字による解説とインストラクターによる音声の解説の違い、つまり文字と言葉の違いは、通時性と共時性にある。展示のコミュニケーションツールとして、文字パネルまたは非文字のサインパネルは、何度も見直せる通時的な記録性を持っていることに対して、インストラクターの実演、観覧者の体験は、そのときだけの一過性のコミュニケーションツールである。

現在の展示室という空間では、再生可能な音声ガイドなどの普及によって、文字と言葉の境界はあいまいになりつつある。しかし、映像に表現した内容を受けたインストラクターによる言葉による解説と実演、パフォーマンスは、その場にいる観覧者を引き付け、「歩く」体験参加に導くことを実現した実に力強い展示表現となった。

(3) 行為による行為の伝達の実験展示

実験展示では、最終的に行為によるメッセージの伝達を試みている。具体的にはく展示解説の映像の

あるきをインストラクターが演じること>とく観覧者があるくこと>という2つの行為を組み合わせている。インストラクターが「かつての歩き方」の模範を演じ、その特色を観覧者に伝える。そして、インストラクターによる演技や映像・画像に合わせて観覧者が自分たちとは異なる姿勢、動きの歩き方を行うことによって、自らの歩き方との違いを体感する。この2つのプロセスで、あるくという行為の歴史的世界を伝える実験をしている。

●実現しなかったサイン表示解説

インストラクターの実演と観覧者の体験とのつながりのなかで、あるく歴史的な世界における自分の歩きを自覚することをこの展示のメインメッセージとしてとらえている。観覧者がこのメッセージを感じ取るまでのプロセスを画像資料、映像資料、実演映像によるプログラムによって構成している。さらにいえば、この実験展示方法の核にあたる行為を行うことによって伝えること、観覧者に様々な歩き方を行わせることがメインメッセージの伝達方法である以上は、歩く行為に観覧者を誘導するために、映像内の文字テロップ、インストラクターの言葉掛けなどによる手堅い伝達方法を選択しなければならなかった。結果として、サインによる非文字の展示解説を試みることは行わなかった。

(4) 展示におけるバリアフリーの実験

実験展示構想当初より、展示における様々なバリアフリー、ユニバーサルデザインとして車椅子使用者の展示室へのアプローチや視覚障害者の人々に対する展示方法などが話し合われた。

さらに、先の光のない視覚障害者の世界を健常者にも体験させる展示の提案は、バリアフリーの展示の発想を逆転させるものであった。実現にはいたらなかったが、このプランから視覚障害者の歩きを健常者に体験させるという展示方法が検討されることとなった。

実際の展示では、展示会場となった常民参考室へのアプローチとして、車椅子の使用者と健常者が同一のルートを確認した。普段の展示では遠回りのせいか、アプローチとして認知されていなかった正面

の玄関への階段とスロープを併用して、エレベーターを使用するルートを確認した。そのルートには、足跡のシールを貼って展示室へのアプローチであることを表現している。

さらに、展示に対するバリアフリーの課題として、視覚障害者に対する展示を考えることとなった。しかし、「歩く」という身体技法を表現する展示であるため、図像と映像が資料の中心となる展示となったため、これらの展示資料の情報を、視覚障害の人々に伝えることは困難であった。

そのなかで、様々な新しいメカニクな方法を取り入れるのではなく、視覚障害の人々に対する基本的な展示方法である、さわる展示を実験することとなった。盲支援学校で受けた展示を伝えるための方法のアドバイスを参考にして、歩くフォルムを表した人形を触ることで、展示メッセージの伝える「歩くにさわる」というコーナーをつくった。そのなかで、かつての歩き方、行進の歩き方などを人形によって表現している。この展示の成果は、今後にゆだねられることになったが、健常者にとっても親しみやすい展示となった。

VIII 「あるく」回廊の実験

(1) 展示設計の委託

「歩く」をテーマとする展示基本プランをもとに、文化環境研究所に展示設計を委託した。展示の概要とともに先の実験的な展示の計画を同時に伝えた。この設計図において、展示構成を以下のように計画された(2-1展示設計図I参照)。

1. 様々な歩き方のなかのわたしたちの歩き方「あるき」を示す導入映像／2. 人生における歩き方「あゆみ」、歩き始めの儀礼の資料展示／3. 「あるく回廊」プログラム／4. あるく回廊のテーマ①図像にみる近代以前の歩き方(「あるき」)②型として伝えられた歩き方(「あるき」)③近代の歩き方(「あるき」)をパネル解説／5. 「触れる展示」として、視覚障害者への対応にもなるようかつての歩き方や行進の歩く姿にさわられる人型を展示。他に実

験展示「あるくー身体の記憶ー」制作記録のモニターを廊下に設置。

(2) 「あるく回廊」の提案

「あるく回廊」は「展示室において観覧者が自らの身体に出会うこと」を実現したものであった。

これまでの「歩く」をテーマとする展示基本プランの実験的な展示概要を文化環境研究所のスタッフに伝えるなかで、歩く行為を伝えることが言葉の説明では難しく、行なってみないとわからないことを、インストラクターの実演を真似た身振りによって行為によって行為を伝える実験的展示方法への理解を求めた。その成果として、「あるく回廊」がデザインされた。実施設計書における「あるく回廊」は、「来館者の『あるく』直接行動を通して、身体で感じ、その行為から見えてくるものを本人自身が問い・考える展示を軸として計画する」「来館者が『あるく』行為を展示の中心に置き、その行為とモーションキャプチャーや資料映像、来館者の動作シルエット、場面状況音などの重ね合わせにより見えてくるさまざまな事象を体験、考える場をつくる」とされた。

● 紗幕の空間

実際に展示した「あるく回廊」の紗幕によって囲まれた空間は、展示の実験を実現する場として歩く図像・映像が映され、その前でインストラクターが実演を行い、観覧者が歩く体験を行う場となった。このプログラムのなかで、観覧者の身体感覚に揺さぶりをかける仕掛けであった。紗幕に歩く人のシルエットが映り、本人がその姿を確認でき、模範の歩きの映像と自分の歩きを重ねあわすこと、また、紗幕の外にいる人たちがそのシルエットを見ることを計画したが、この映像と体験と実演をシルエットを通して重ね合わせる構造は実現しなかった。

(3) 「あるく回廊」映像プログラム

● プログラムの構想

展示設計の段階では「あるく回廊」のプログラムはまだ構想の域をでるものではなかった。プログラムメニューは、①図像にみる近代以前の歩き方（ナ

ンバで歩いていたのか？ 裸足で走っていたのか？ 子どもは裸足で歩いていたのか？ 草鞋・草履・足半・下駄の使い分けは？）②型として伝えられた歩き方（「あるき」） 舞踏・能（摺り足）日本舞踊（ナンバ） 武道・剣道（摺り足）③視覚障害者の歩き方、手を引かれて歩く姿④近代の歩き方「あるき」として、行進（軍隊・学校）（行進ができない日本人・靴になれない日本人）として構成することを計画していた。これらのメニューが順番にできるようにするか、インストラクターによってメニューが選択できるように演出を考えた。

回廊中央部に履物（草鞋・草履・下駄・藁沓・田下駄など）を展示する。体験の1つとしても、履物を使用することを計画した。

その結果、展示全体として「歩く回廊」の後に、画像・映像・実演・体験を通して表現された「近代以前の歩き方」「型として伝えられた歩き方」「近代の歩き方などの歩き方」を映像でない、資料と写真・文字パネルによる解説の展示として表現する展示構成となった。

● プログラムの実施

その後、先に述べたように「歩く」図像と映像の資料化が進み、「あるく回廊」の映像プログラム「身体の記憶の発見」を作成した。映像プログラム用の映像制作の段階に入り、新規の映像として、現在の私たちの歩く姿を神奈川大学のキャンパスで撮影するとともに、役者によるかつての歩き方の再現の撮影を行なった。

この実験展示のメインメッセージを伝えるプログラムを作成するまでは、映像担当のディレクターとのシノップシス、シナリオのやり取りは数度に及んだ（参照シナリオ）。当初は、あるく回廊のプログラムは歩き方それぞれが別のメニューとして選択できるように計画したが、観覧者がそれぞれの歩き方を結びつけることによってかつての私たちの歩き方を探れるように、歩き方をまとめた構成のプログラムとして作成することとした。プログラムの所要時間は10分程度を制限することを考えていたが、一つのメニューとしてまとめてさらにそれぞれの歩き方の体験を取り込んだ結果、13分となった。

結果として、「あるく回廊」映像プログラムは、①映像編と②実演・体験編の2部構成となっている。ここでは、展示に使用したプログラムの要点を記すことにとどめたい。

①映像編

映像プログラムは、現代の私たちの歩く姿を導入として、かつての歩き方を図像資料・映像資料によって表現し、さらに役者が再現した映像を加えてその特徴を観覧者に伝えている。

具体的には、A「腰を落として膝を曲げて歩く」ことを演じる役者の再現映像(4 映像展示参照)は、今でもみられるような歩き方となった。しかし、B「右足とともに右半身を出して歩く」ことを演じる役者の再現映像は、現在ではみられない不自然にみえる歩き方になった。

そして、摺り足を「腰を落として膝を曲げて歩く」特色を伝える歩く型として紹介するとともに、行進が近代的な歩き方の普及のきっかけとなったことを紹介している。

②実演・体験編

実演・体験編として、再現映像とインストラクターによる実演の模範演技に合わせて、観覧者が自分たちとは異なる姿勢、動きの「かつての歩き方」を行ない、自らの歩き方との違いを体感する。「観覧者に自らの身体を自覚してもらう展示装置・観覧者の身体に何らかの訴えかけを感じ取らせる仕掛け」であった。

その内容は、「1. 普通に歩く／2. 行進／3. 摺り足／4. 腰を落として膝を曲げて歩く／5. 右足とともに右半身を出して歩く：TypeA 不自然な歩き TypeB 自然な歩き」の6種類の歩きである。インストラクターによる実演をみて観覧者自身が行う体験の2つの行為を組み合わせたなかで自分の歩きを自覚させ、「歩く」行為の歴史的世界を伝える実験であった(5記録写真参照)。

(4)「あるく回廊」の可能性

●観覧者は「あるく回廊」に参加してくれたか？

展示を企画した立場として、まず危惧したのは観覧者が「あるく回廊」の体験に参加してくれるのか

どうかという問題であった。

しかし、インストラクターによるコミュニケーションと実演は、観覧者を十分に引き付け、「歩く」体験へと導く力強い表現となった。行為を行為で伝えるこの展示の特色が良く示された伝達方法であったと考えられる。「歩く」という日常的な行為の体験は、多くの人が気軽に参加して行なわれた。

●「あるく回廊」は展示として成立していたか？

「あるく」行為は、子どもから老人まで多くの人が参加しやすいテーマであり、観覧者が気軽に参加でき、自分自身の歩き方を見つめなおすことのできる展示であったといえる。

しかし、技術的な問題点として、8人程度までの参加人数の制約、13分という長さのプログラムへの参加のタイミングなどの制約を改善する努力が必要であった。⁽²⁾

Ⅸ 「あるく—身体の記憶—」の2つの実験の課題

(1) 展示した「あるく—身体の記憶—」の構成

「あるく回廊」がこの展示の導入とともにメインメッセージの表現の場となったことは記した。展示全体としては、「あるく回廊」を中心として、「かつてのあるき方をさぐる」「あるくにさわる」の3つのコーナーによって構成している。

「かつてのあるき方をさぐる」は、「あるく回廊」と同様に、かつての歩く姿の図像資料、映像資料の特色を捉えることで、かつての歩き方を考える。また、あるく回廊において映写した図像資料などをパネルに仕立てることによって、明確にかつての歩き方を提示するコーナーである。

「あるくにさわる」は、先のバリアフリー展示を試みる実験として人形を使ってかつての歩き方などのあるくフォームを復元し、そのフォームをさわることで、より立体的にあるくことによって、身体のあるき方を感じとってもらうコーナーであった。

また、「あるく人生」と「脚の人生」という小コーナーを展示している。「あるく人生」では、熊野

観心十界図の上半部に描かれた大きく半円弧の帯に、「人生の階段」と指摘された出生から死に至る人生の各世代の歩く姿をパネルにしている。「脚の人生」は、昭和10（1935）年前後の制作と推測される実験映画で全編の映像のほとんどが歩く様子を映している特異な映画の映像を展示している。

（2）発信する情報の実験の課題

●「あるく回廊」の展示メッセージ

「あるく回廊」の展示メッセージの伝達方法は次の通りであった。

①「かつての歩き方の「記憶」が私たちの身体に伝えられている可能性がある」という仮説のメッセージ。②「あるく回廊」における行為による展示によって、観覧者は無意識に行っている自分の歩きに揺さぶりをかけられる。③その結果、自身が感じ取ったかつての歩き方に対する感覚のなかに置かれる。④そこからは、観覧者自身の思考に任せることを意図している。

●「歩く」体験のメッセージの可能性

これまでの歴史系博物館における体験展示は、欧米のチルドレンミュージアムの影響から子ども向け展示における、天秤棒による肥桶担ぎ、石臼まわし、などに代表される体験学習に活用されている。これらの体験学習の展示は、実際にはそれぞれの道具を使うコツが必要となるのだが、かつてのくらしにおける苦勞、大変さを体感することをメッセージとしていることが大半である。

しかし、例えば肥桶担ぎのときは、現在の歩き方と違い腰を落として膝を曲げ、半身を開いてあるく。身体の使い方がどのように違っているのかという視点では、これまでの体験展示ではつくられてこなかったのではないのだろうか。つまり、行為によってもっとも効果的に伝わるメッセージの豊かさに気づかず、先人の苦勞、大変さといった定型的な決まり文句しか伝えようとしていないのではないかと考えられる。このような体験展示の現状に対して、体の使い方の違いからくるもの、そのことを行うなかでのやりにくさ、大変さが意味するというメッセージを伝える必要がある。逆に言えば、違いを伝えるた

めにこそ、その行為を認めてもらう、考えてもらうことに意味があるのではないか。そこに身体技法の歴史的世界がひろがっている。

●展示メッセージの問題

「歩く」の提案に示された奥行きがひろがるテーマに対して、あまりに多くの課題が残されているのだが、その基本は身体の動き自体を、歴史的・文化的にとらえようとした当初の構想にそったメッセージが十分に用意されていないことに尽きる。

これまで記した通りに、身体の記憶としての「あるく」歴史的な世界を明確なメッセージとして伝えられたわけではなかった。例えば、歩く姿の一つとして提示した「膝を曲げ腕をあまり振らずに歩く」ことが、かつての「腰を落として膝を曲げて歩く姿」とどのように結びつくのか、近代における行進の普及、訓練によってどのような影響があったのか、想定以上の明確なメッセージを伝えていない。観覧者は揺さぶりを掛けられた自身の身体感覚のなかに残り残されることになる。この展示の現状としてそこからは、観覧者自身の思考に任せることを意図している。

「歩く」ことに対する歴史的な位置付けの表現として、想定したかつての歩き方が、近代化以降の変化のなかで、現在の私たちの歩き方とどのような関係にあるのか、明確に位置付けていない。近代的な歩き方の導入として「行進」を紹介しているが、行進の訓練、普及によってどのような影響があったのかは明確なメッセージをあえて伝えていない。

その結果、近代に入ってからどのように歩き方が変わってきたのか、変わらない部分を持ち続けるのか、それぞれの可能性を示せていない。

このような近代化のなかの身体技法の変化を、あえて明確に伝えなかった。このことは近代化における長期的な変化のなかの個人の身体技法の位置付けに対して、画一的なメッセージを伝えることはできないと判断したからであった。

そこには、私たちの歩き方の多様さが、何によってもたらされるのか。無意識にどのような歩き方を選択しているのか。説明がつかない現状を解きほぐす糸口になったにすぎないと自覚していたからであった。

●自分が身につけた「歩く」の位置付け

観覧者が歩いた先に感じ取るメッセージとして、自分たちの歩きのなかに、この展示で想定したかつての歩き方が残されているのか、観覧者自身の歩く感覚、歩き方の認識がどこにあるのかを、わかりやすく観覧者の思考に任せて感じ取り、理解してもらうための、「歩く」指標（ガイドマップ）などの展示表現が必要であると考えるにいたった。その表現を行なうためには、近代における「歩く」ことの資料化を進めなければならない。

(3) 発信する方法の実験の課題

今回の実験の課題は、「あるく回廊」という能動的な展示方法の位置付けにある。身体感覚に訴えかける「あるく回廊」が中心となった展示室を意図して構成している。多くの人が気軽に参加できるこの展示は、展示全体の導入となるとともに「かつての歩き方が身体に記憶されている」という主要なメッセージを伝える場となっている。

「あるく回廊」で感じ取った感覚をクールダウンさせて、この展示の情報を資料とパネルで展示したコーナーで理解してもらう展示意図が、十分に機能していない。「歩く回廊」と他の展示とのバランスを再調整して構成する必要がある。

(4) これからの実験展示「あるく—身体の記憶—」に向けて

これまで記してきたことは、今回の展示に対する課題の指摘であった。しかし、この展示が持つ可能性を伸ばすためには、もっと広い視野にたった課題を考えていく必要がある。

この展示で十分には実現できなかった企画段階からの市民参加、観覧者調査による展示づくり（エバリュエーション）、バリアフリーの展示、全く実現できなかった文字を使わない展示解説、展示室にお

けるかつてのアチックミュージアムの調査場面の再現など、残された課題、アイデアは多い。

しかし、再三述べてきたが、この展示が十分に表現できなかった最も重要な点は、「歩く」という身体技法を歴史の反映した文化としてとらえることだといえる。この観覧者に伝えるメッセージを豊かにしてこそ、展示の課題、展示方法のアイデアを実現する手立てを考えることができる。この実験展示はテーマへの調査の遅れ、不十分さがこれらの課題を残す結果となったと考えられる。

様々な「歩く」を文化としてとらえるアプローチがあるだろうが、とりあえず述べておきたいことは、歩く姿からその人の職業、社会性が表現することであり、少なくともそのことに対する認識を導き出すことができたなら、この展示のメッセージは格段に豊かなものになっただろうということである。

展示では、近代における歩き方の変化を、単に行為の変化としてだけしか表現しなかったが、近代における歩き方の変化の持つ文化的な意味を、西欧的な身体技法を受け入れていくプロセスとしてとらえる一方で、それを拒絶しながら従来の歩き方をアレンジしていくプロセスとしてとらえる視点が必要である。そして、その両者の関係が持つ社会的な位置付けは、先の歩く姿が持つ社会性につながっていくのだろうと想像される。

再度、実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくり直すなら、このアプローチから取り掛かることが有効な準備の一步となるだろう。

（あおき・としや）

【付記】本文中の『濫澤フィルム』という語は、濫澤敬三による写真、映像資料のなかの主に動画資料を指している。スチール写真については『濫澤写真』という語を使っているが、動画資料については、まだ総称が確定していないため、こうした表記をとったことを付記しておく。

【注】

- (1) この報告の時点で刊行されていなかったものだが、田部英正著『美しい日本の身体』（2007 筑摩書房新書）でも「よそ歩幅が狭く、爪先の方に体重をかけながら、膝から下を小刻みに動かしては、足裏を引かずって着足するような傾向」と共通した歩き方を記述している。
- (2) 実験展示の終了後に、実演メニューを短縮して12分のプログラムにした。

【参考文献】

樺山紘一 1987 『歴史のなかのからだ』 ちくまライブラリー

三浦雅士 1994 『身体の零度』 講談社選書メチエ

中澤克昭 2005 「村の武力とその再生産」 『「もの」から見る日本史』 戦争 I 青木書店

吉田裕 2002 『日本の軍隊』 岩波新書